

# 少年の目的意識

医学博士・脳機能生理学者

加藤俊徳

少年は、幼少のほとんど毎日、祖父の船の上で朝日を感じて目覚め、日本海に沈む夕日を見て一日を終えていた。波に揺れる感覚、波の音、カモメの鳴き声、おぼろげに見える佐渡島、波間に揺れ反射する太陽の光のイメージ、潮風を感じた肌のフイーリング。それらは、いまでも脳裏に焼き付いている。

小学校時代、少年は、学校に行っても海のことを気になって仕方がなかった。落ち着いて机に向かい本など読む暇はなかった。燃えるのは、外に出られる体育の時間と図工の時間。教室で集中できたのは、住職も読んでいた担任教師の道徳の授業だった。本を読むより、道徳の理屈がなるほどよく理解できた。

中学に進み一年のとき、「先生、どうやって勉強したらいいですか？」理科教諭の担任に尋ねた。「本を読んで、一生懸命に勉強すればいいのだよ。」「勉強したいけれど、やっぱり勉強の仕方が分かりません。先

生！」担任は、少年の質問への回答に窮していた。少年にとっては堂々巡りで、痒いところに手が届いていなかった。家では母にも相談したが、「学校に行って、授業中よく話を聞いて、予習復習すればいいんだよ。」そうなだめられるだけだった。少年は、「勉強することによって達成すべき目的が何であり、どのような学習方法が勉強と呼べるのか？ そのような勉強の仕方によって何が達成されるのか。」それらの答えを求めていたのだ。しかし、うまく質問することができなかった。以来、勉強とは何をする事なのか？ ずっとくすぶり続けていた。

少年は、「勉強したい！」と担任に向かって豪語してみたものの、実は、勉強より、ヘラクレスのように肉体をもっと鍛え、万能の運動能力を身につけることが最上の価値であると思いついてきた。だから、暇さえあれば、どうやったら速く走り、高く飛べ、強くな

Profile



1961年新潟県生まれ。米国生まれの2児の父。寺泊町立野積小学校、寺泊中学校、新潟県立長岡高校、昭和大学医学部、同大学院医学研究科卒業。医学博士。小児科専門医。脳機能生理学・脳画像・光脳計測の専門家。1991年30歳のとき、国立精神神経センターにて、世界中で利用が広がっている光機能画像法の基本原理を最初に発見する。1995-2001年まで米国ミネソタ大学で研究に従事。帰国後、現職の財団法人 濱野生命科学研究所 小川脳機能研究所の主任研究員として、脳機能研究成果のスポーツ、福祉、医療など多方面での普及に努める。

れるのか？ 少年なりに検討し、効果があると思っただけならどんな練習でも取り入れて、日々の自己鍛錬に励んでいた。その甲斐あって、中学三年には、背筋力が二百キログラムを超え、ジャンプ力は百センチメートル、胸囲百十、太もも六十の、ほとんど脂肪のない完全筋肉体型になっていた（今はその面影も無く無残だが）。また、その一方では、体を鍛える方法があるのだから、勉強する方法があるに違いないとも思っていたのである。そんな肉体派の少年に、新たな目的意識が生まれるときがやってきた。中学三年の夏だった。

蝉が鳴き日差しが照りつけるグラウンド、海が見え潮の香りがするグラウンド、陸上の県大会を前にして、少年は朦朧とした状態で練習に励んでいた。彼はなぜか「ニューアンス、ニューアンス、イメージ、イメージ」と独り言をつぶやく習慣ができていた。朦朧としながらも、「なんだこれは、どこからくるのだ……」。

そうだが、脳だ！ 脳からくる。そう独り合点した。ココロのつぶやきが、脳をつぶやきだと感じた瞬間だった。ほんの一瞬だったが長い時間を感じた。人体に関する基礎知識がまったくない少年が、肉体を鍛え続けた結果、その先に見えたのは脳の働きの神秘だった。今にして思えば、実際に運動するために働く脳の場所と運動をプランする場所は、異なった場所であり、イメージトレーニングは、まさしくその運動プランの脳部位をトレーニングしていた。肉体を酷使することは、運動プランと実運動を引き起こす部位との連携を鍛えていたのだ。肉体の限界を飛躍させる可能性を脳機能に見いだした。その夏、少年は、陸上の県大会で優勝した。その大会が終わると、少年の興味は、肉体の鍛錬と働きでなく脳の鍛錬と働きへ転換し移った。そこで、少年は医学部を目指した。医学部に行けば、

脳のことは何でも教えてくれると思っていて。高校に入学して、いろいろな運動部から誘いを受けた。しかし、すべて断った。そのころは、脳のことを知りたいと思う気持ちに比べると、運動に費やす時間が、無駄に思っていたのだ。不思議なくらい、全く興味が湧かなくなっていた。

医学部に入学してからの六年間はあつという間であつた。そのあいだ、脳神経外科や神経内科の授業を受けても脳の鍛錬や脳の働かせ方を教えてくれる内容は、いつまでたつてもなかった。本をむさぼるように読んでも、ネズミやサルの実験結果が羅列されているような内容ばかり、医学の本には病気のことが延々と述べられていた。だれにきいても、やはり痒いところが手が届かない。

脳の鍛錬や脳の働かせ方を教える診療科はなかった。そこで、卒業後、色々迷った挙句に、理屈がなく教科書を丸ごと覚えなくてはならないために最も成績が悪く、子供の成長する過程がよく理解できなかった小児科を選んだ。しかし、これが大いに転機となった。赤ちゃんは自ら話さないで、診る側がよく観察する。他の科学的な計測手段を媒介にして観察しなければならぬ。子供の成長過程を診察し、考えている間に、ベッドサイドで脳の働きの計測する手段を発見した。少年は三十歳になっていた。肉体至上主義から脳機能へ転じて十六年目の快挙だった。それまで、少年が知りたかった脳の鍛錬法や脳の働かせ方を調べる客観的な計測法が無かったのである。三十歳になった少年が、最初に発見したこの光を使った脳機能検査法は、ここ十三年の間に世界中に広がり、医学だけでなく、教育方法や運動方法の開発、障害者の支援脳機能検査にも応用されようとしている。